



寒  
燒



廣瀧 光（ひろたき ひかる）

杭詩文会代表

琥珀・阿房芋同人

埼玉詩話会運営委員

大宮詩人会常任理事

埼玉県文化団体連合会理事

〒330 大宮市三橋4-122-3

---

詩集 寒い夕焼

1985年 5月15日 印刷

1985年 5月25日 発行

定 価 1,800円

著 者 廣瀧 光

発行所 麗 文 社

大宮市三橋4-122-3 〒330

電話 0486-23-8417

印 刷 中沢印刷株式会社

---

# 目次

序 槇 皓志

まつり

狐

冷秋

祭

翳

霧

唄れた季節

私の中の海

蜃気楼

川は濁ったまま暮れる

川は雨の季節

日常を横切るもの

寒い夕焼

失落の街角

残照

5

12

14

18

20

22

24

26

28

30

34

36

40

42

46

48

満奇洞・タイムトンネル

夜の祭

水槽

演奏会

砂上の午後に

日射病

手紙

朝雨

振りむくなんて  
バカね

刻

秋雨

風邪

舞い舞い風

屈折

あとがき

装画 佐藤睦郎

84 82 80 78 76 74 72 70 68 66 64 60 58 54 52



寒い夕焼  
序  
楨  
皓志

廣瀧光——と記すと、ヒカリとかヒカルとか読む人が多い。どっちにしても男だと思うらしい。思う人が多いから、私も気が楽だ。

女性をまともに褒めると、褒めた人間がおよそ頓馬に見える。光<sup>▲</sup>を活字で褒めても、頓馬に見られる心配は少い。

時の調子で、本人までミツだのコウだの勝手に称している。正称を知らぬまま、思えば、ずいぶん長いあいだ褒めたり貶したりしてきた勘定になる。

二十年くらい前、県だか市だかの講演会で話をした。話を終えたら、ひどく澄んだ声で鋭い質問を發した乙女がいた。質問の内容は忘れたが、帰り途が一緒で、名刺をくれたので見たら、廣瀧豊光という草月流の生花の師範であった。名の上部の豊<sup>▲</sup>は、原田豊朱師から貰った豊で、下の光<sup>▲</sup>が本名だと聞いた。併せて、乙女ではなく人妻だと聞いて、どういうわけか少し残念に思った記憶がある。

それから二十年たった今も、廣瀧光は、ふしぎなほど乙女めいている。知人のところへ使いに行ってもらうと、「お嬢さんにご足労かけて……」という礼

状が来たりする。

福田崇廣は『つり人のうた』の中で、「白いパンタロンの妖精」などと、調子のいい言辞を振舞っていたが、何としてもトクな女性である。

トクな分だけ、しかし心情もいささか稚い。傷つくことも多いし、ときおり素頓狂な失敗をしでかしてくれる。

感性は並はずれて鋭いから、失敗にも念が入ってくる。が、真実底なしのお人好しと分っているから、怒るわけにもいかない。

会合の折、「わたしはマキコウシに学び……」などと、当方が気はずかしくなる謙辞を述べてくれる。で、マキの樹も少しは高く見えるかと身をのびしかけると、途端に椅子を引いて悲観の底に突きおとす。

突きおとしておいて、いろんなことを相談に来てくれる。

交友のこと、表現のこと、たまにはナキゴトも聞かせてくれる。聞かされる当方は、嫁にやった娘に対する親仁のような心境になる。

何でも聞き容れねばならぬと思い、何も出来ぬ非力を嘆じ、あבקは街を去り、ひとり山居をきめこんだ。それゆえ、まともな解決策を授けた覚えは少しもない。

廣瀧光の詩作品について、県の文芸誌や新聞の選評（第四回増玉文  
学賞準賞受賞）で何度か述べた。その鋭い詩感覚を讀えた。あれ以上は褒めにくい。褒めたら、本人がかわてて傷つくにちがいない。

観念語の多い、醸成未熟の、難解ひとりよがりの作品もある。が、その佳点は、本詩集を読む方々が、それぞれ十分に感じとってくださると思う。

廣瀧光のような詩は、私には書けない。書けないだけに魅せられる面も多い。豊かな資質の持主だし、詩集の上梓を機に、おのれの傷を養分とする若さも持っている。

たしかに、“寒い夕焼”の今日の世情だが、そこに棲み、そこに耐えて、たとえ傷つきつづけても、光はいつまでも若くあつて欲しい。

序などと、晴れがましい場に据えられて、少しは気張ったことを記そうと念

じたが、あっさりあきらめた。

詩の作者が美人を想わせたりすると、どうも言辞がなまっていけない。娘の出来を、ノロける塩梅になりかねない。ひたすら、今後の祥硯を祈るばかりである。

一九八五年 早春

楨 皓 志



寒い夕焼

## まつり

火祭りの夜

女は年輪を削りはじめる

しだく祭囃子

衰顔の三日月

反芻する記憶の

ほてりに

凍てはじめる晩秋

慟哭に似た祭囃子の

終演におびえ

カラスウリいろの愛を  
筐に詰めかえた日から

女は裸足で歩く

子は生まなかった

消化しきれない語尾

闇の疼き

寒風にうずくまる姿

女の中の般若

月の蒼さに

祭りの炎が<sup>ほむら</sup>

燃えつきて 冬

## 狐

雨に濡れていたかった

足にまつわりつく朝焼け

まだ点滴のしたたる

コーヒー色の

髪の逆立つ 娼婦

きのうの太陽に灼いた

悔恨のしみの

母なる女ひとの 黄ばんだ結晶